

○五年十二月十六日には清国開教総監にも任命されている。この大谷尊由については、現在までまとまった研究がなされておらず、今後大連のみならず、中国そしてアジア全域の本願寺派の活動を見てゆくうえで欠かすことのできない検討課題となっている。

関東別院はその住所を大連市乃木町から西公園へ、さらに信濃町から播磨町へと移しているが、その間の事情はまだ明らかになっていない。とくに広大な境内地を誇った播磨町への移転の事情は、当時の本願寺派と現地の軍、行政官庁との関係を考えるうえでも重要であると思われる。今後さらなる考察をすすめてゆきたい。

## 真宗障害者福祉における「自立」考

——社会モデルを視野に入れて——

頼 尊 恒 信

本発表では、三願転入の具体的内容と真宗障害者社会福祉との関係性を明確にした。その上で、真宗における障害者社会福祉の考え方の内、障害者の「自立観」について考えた。また、そのような真宗障害者社会福祉における自立観と、近年の障害者運動の主流の思想である社会モデルの考え方との関係性を顕かにした。

その中で、真宗障害者社会福祉に基づいた障害者運動は、欧

米を起点とする障害者の自立生活運動とその源を異にするとした。つまり、真宗障害者社会福祉は、「個人」の自立の援助展開ではなく、諸仏史観に照らし出され、本願の呼びかけの中にある身ということを自覚した「われら」という「宗」団としての自立運動の展開なのである。それは、「ありのままの姿で生きる」という姿を通して、向下的共生道を顕かにしていこうとするものである。しかしながら、それと同時に、欧米のような「個人主義」をベースとした「自立」運動ではないということが言えるのである。つまり、「自立」という事象に関して、欧米のようなスキルを獲得して向上していく中で個人が顕かになり、インクルーシヴされていく社会が作られていくような自立観ではない。むしろ本願の働きを受ける身となるという意味において、向下的平等観に出遇うことによって、限らない向下的共生道という地平を得ていく自立観なのである。そこには自立へのスキルの獲得の有無を問わない向下的共生運動が展開されるのである。つまり、スキルの獲得性自体に「すでに生きることができる」という諸仏史観に相反する思想を見いだしていくような共生観であり、独立観なのである。

このような、自立観に生きることとは、「すでに障害者も生きることができると」という自覚のもとにある向下的生活道としての障害者運動なのであって、「社会モデル」を三願転入の物語のようにたとえ、「社会」との関係性を切り離して、自身の「転依」のあゆみとして語ることが、真宗における障害者社会福祉の考え方の主たる方向性ではないのである。つまり、三願転入の構造を用いて「自力・他力」と峻別を障害者自身の「障

## 第7部会

害受容の歩み」として、社会と切り離して、個人化していかうとする考え方ではないのである。むしろ、この「自力・他力モデル」は、社会との関係性において成り立つ「転入物語」なのである。

つまり、「自力・他力モデル」は、自身の内面の「あゆみ」を第二十願の機の問題として考えることが可能である。しかし、それは社会的関係論が問われてこない場においては、「諸仏史観」を個人モデル化してしまうのである。逆に、いくら社会との関係性の中で「向下的生活道」の内実を検討していたとしても、一人の人の内面に現れた「三願転入」という「転依」の構造が問われてこない場においては、向下的生活道は、全くの空論となってしまうのである。つまり、真宗における障害者社会福祉の考え方は、個人の問題としての第二十願の機の問題を内包しつつも、向下的平等観の実践としての健全者と障害者の関係性としての「社会モデル」が問われてこなければ意味がないのである。

その上で、真宗障害者社会福祉は、向下的共生道という新たな価値観における創出運動なのである。また、健全者と障害者の関係性を考え、向下的平等観の実践としての「共生」であることを顕かにしたのである。健全者が抱える自らの健全者幻想と向き合い、自らが持つマジョリティー性を見つめることによって、これまでマジョリティー側が「健全」という指標を無意識的に優先してきた結果として生み出された「障害」問題が顕かに内在化される。それは、社会構造としての「障害者差別」の向き合っていく視座を得ていくことである。そこに至っ

てはじめて向下的共生運動の本質が社会モデル運動と同種の問題意識を抱える「社会運動」に転化していくと考えるのである。

## 三願転入とカウンセリング

——親鸞とC・ロジャース——

友久久雄

心の悩みを解決する方法として、洋の東西を問わず宗教家が関ることが多かった。特にわが国では、江戸時代からの寺請制度により、お寺と檀家との結びつきが強く、住職が檀家の人々の悩みに応じることが多かった。すなわち宗教的アプローチである。

しかし、第二次世界大戦後の社会変革により、これらの制度や習慣が稀薄となり、現在では、人々の心の悩みはもっぱら精神科医や臨床心理士のかかわりが中心となってきた。すなわち心理的アプローチである。

そこで本稿では、両者における心の変化過程を明らかにするため、宗教的アプローチとしては親鸞（一一七三—一二六二）を宗祖とする浄土真宗（以下、真宗とする）を、心理的アプローチとしては、C・ロジャース（一九〇二—一九八七）が開発した非指示的療法を取りあげ検討してみたい。

親鸞は、教行信証・化身土文類六において、真宗のプロセスを自身の経験により「三願転入」という形で示している。